

露西亜人と支那人らの税関吏が来て荷物を調べた。

私共は又先に通つて来た道をあかず眺めながらハルビンへと向つた。道すがら停車の時間が少し長いと、夫や島崎さんは一寸飛び下りて植物を採集して下さる。興安嶺の驛では山躑躅の花を露西亜少女が賣りに来て居たのを買った〔鳥居君子1928〕。

5 / 31 ハルビン駅から東支線で阿什河に向つた。金の上京に到着。6月1日午前中にハルビン、北満ホテルにはいる。

6 / 2 スンガリに行く。日本人の本屋の主人が『満蒙の探査』をみて、阿什河に行ったという。鉄橋附近に支那の軍艦2隻が投錨。ボートに乗る。

私共は之から蒙古入の出来なかつた其のかわりに、もつと有益にあと一二ヶ月は過ごしたいものだと考へた。それで少し危険ではあるが、長春に引返し、あれから吉林省の奥に這入つて見たいと思つた〔鳥居君子1928〕。

6 / 3 午後3時長春駅に着き、ヤマトホテルにはいる。ほかに日本人経営の富士屋ホテルがある。領事館と満鉄公所を訪問。夜の汽車で吉林に向かう。吉林では名古屋ホテルに泊まる。

6 / 4 吉林の天主堂でミサ（天津の博物館長のリサン霊父）。幸子に前年の1月に亡くなつた「巴里のお兄さんは如何」と聞かれたという。この日未明、張作霖事件がおこる。

6 / 5 龍潭山に行く。吉林駅にもどる。同じ宿に泊まる敦化の満鉄公所の河野公所長に会う。敦化まで同行することになる。6日吉林から汽車で老爺嶺駅までくる。7日老爺嶺から蛟河。8日二道河子から蛟河、六道河子に行き泊まる。

6 / 9 朝5時に出発。昼ごろ大沙河の吉敦鐵路工務段に到着。二道河子から4里。段長の宿舎で泊まる。

6 / 10 大沙河から威虎嶺、陳家河、魚亮子をへて黄泥河駅に着く。「朝鮮人の家族が所々野地の中に掘立小屋を造つて其の周圍を少しずつ開墾し始めて居る所があつた」〔鳥居君子1928〕。

6 / 11 7時頃出発。巡警6人が護衛。約4里で臭季子溝で昼食。太平嶺に進む。午後5時ごろ敦化に入る。満鉄公所の河野公所長の部屋に泊まる。

6 / 13 敦化古城（敦東城）調査。満鉄公所に帰り着いたころ、敦化県の徐彬敦化知事が訪問、敦化城西南方1里半の山城についての調査をすすめられた。

6 / 14 河野公所長の招待。敦化街の支那料理屋。敦化電報局長黄憲章、敦化商會副會長蘇履成、東北陸軍歩兵十三旅第七團少校團附趙廣善、そのほか敦化の重要な役職数人が招待。

6 / 15 朝6時、敦化城から石頭河の村に着く。大石頭河と黄泥河の合流地点の山城（城山子山城）。徐彬敦化知事に教えられたという。午後3時、知事の招待会があつた。知事官邸内の広間でおこなわれた。列席は河野公所長の宴とおなじ20名ほどであつた。

6 / 16 朝6時、敦化の東方、安図へ至る哈爾巴嶺の麓に高麗の遺跡遺物の調査。帰路、二道

梁子の豪農家に泊まる。

- 6 / 17 黄土腰子をへて、12時ごろ牡丹江に出る。午後2時ごろ満鉄公所に帰り着く。
- 6 / 20 5時半に敦化を出発。臭梨子溝をへて黄泥河子驛に到着し、行きとおなじ大工宅に泊まる。
- 6 / 21 5時半に出発。陳家店に着く。12時ごろ威虎嶺のトンネル（工事中）東口に入る。西口では土砂の崩壊。威虎嶺の公務段で昼食。2時半ごろ鉄道線路の新道をとおって、大沙河の公務段。泊。
- 6 / 22 端午の節句。モーターカーで蛟河まで、午前11時ごろ着。この日、汽車が開通した。
- 6 / 23 8時10分発の吉林行き列車で出発。午後1時吉林駅に到着。領事館を訪問。午後5時発の長春行きの列車に乗る。8時ごろ長春に着き、ヤマトホテルに泊まる。
- 6 / 24 午後3時の大連行列車で出発。公主嶺から蒙古学者の菊竹氏が同乗。午後10時半、奉天に着く。ヤマトホテル。奉天から大連に帰る満鉄松岡副社長に会う。奉天から、同行の鳥崎写真技師は大連の自宅にもどる。

汽車が奉天に近づいた頃であつた、列車のボーイが張作霖の殺されたという、場所を見せてくれた、私共は先に敦化に居た時、此凶報を耳にしたのであつた、夜であつたが、電氣の光で能く見えた、恰も上の方を私共の汽車が走つて居る、此レールと十字形になつて居る處の、その下のガードを、東の方へ少し出た處に、焼け残りの汽車や、曲つたレール、ガードの煉瓦が、ひどく破れた箇所など無惨な跡が其儘に残つて居て、當時の物凄かった様子がまざまざと見える様で、思はず身内が震えるのを覺えた〔鳥居君子1928〕。

- 6 / 25 總領事館、満鉄公所を訪問。城外の骨董店をまわり、満鉄公所に立寄つて、奉天駅に急ぐ。午後1時30分発の大連行の汽車に乗る。夜の8時30分に大連に着く。「何だかもう日本に帰へつて来た様な気がする」〔鳥居君子1928〕という。ヤマトホテルに泊る。

五月十五日であつた、大雪の日に此ホテルの二階から、街を眺めて居た事を、思ひ出して見ると、教の淋しさは、どうしたのかと不思議な位にひっそりとして居た、停車場に集ふ人も稀で、廣場に客待の馬車も腕車も大變淋しさうであつた〔鳥居君子1928〕。

總領事館から帰へつてから、菊竹さんの御案内で、城内の満鉄公所を訪問した。城内でも一流の場所で、建物も大變美しいものである。階上の見晴らしに導かれて眺めた、城内は一望の内に指摘され、張作霖の居つたもと満州の宮殿も、近くに眺める事が出来る、喪の假屋が白く高く、宮殿奥の方に聳えて居た〔鳥居君子1928〕。

此處の満鉄公所では、鎌田所長に御目にかゝつた、私は始め支那人と思つた位、支那服が能く似合つて居られる、多くの支那の大官連と、親交のある方で、張作霖や呉俊陞の死を非常に悼んで居られた、そして従容として、支那人達の處置を稱へて居られた〔鳥居君子1928〕。此骨董店に居た時前の通りを多くの大官連が、自動車飛ばして、張作霖の葬儀場に行くのを見た〔鳥居君子1928〕。

鳥居一行は5月21日、鄭家屯の日本領事館で北京の政治状況の様子を聞いていた。「領事」婦人引き上げの情報は信憑性があった。危機的状況にあった。

6/26 午前11時の列車で鞍山に向かう。夕暮れ時に鞍山駅に着く。駅には林所長、矢澤校長、梅本先生などが出迎え。満鉄倶楽部に泊る。

6月27日～7月7日、鞍山に2週間滞在。漢代墳墓数カ所、苗圃附近の2基の古墳を発掘。千山の画像石、遼金の土城、明の古城、桜桃園のストーンサークル、遼代の鉄の採掘跡などを調査。

7月8日、夜半、鞍山から汽車で大連に向かう。9日朝に大連。満鉄本社の松岡副社長、岡理事に挨拶。「其他数カ所訪問して」、午後から自動車で旅順に向かった。関東庁を訪問、木下長官は不在、博物館を見学。ホテルに木下長官から電話があった。星ヶ浦の料亭で満鉄本社の招待(満鉄重役代)をうける。10日大連発の重米利加丸に乗る。13日早朝、神戸に着く。

鳥居一行が各地の領事館、満鉄公所でえた情報は、同じ年の1928年5月国民革命軍の北伐が北京にせまる政治情勢にはかならなかった。6月4日午前5時23分、張作霖は関東軍参謀河本大作大佐の策謀で爆殺された。爆破の日、鳥居一行は吉林にいた。その3週間後に爆破現場を通過した。鳥居たちは吉林にいたのであった。

鳥居らが接したのは領事館であり、満鉄公所であった。事件の情報をえる条件にあった。日本国内では翌年の1929年に議会で問題となったという。その関東軍の秘密性と暴虐はノモンハン戦争につながる。

鳥居一行の旅は、1918(大正7)年のシベリヤ出兵から10年、1922(大正11)年のシベリヤ撤兵から6年、北伐、1927～1928年の山東出兵、張作霖爆破事件の最中、満州事変(1931年)の3年前のことであった。

2. 映画〈地平線〉とノモンハン戦争

2010年2月15日、『徳島新聞』で鳥居龍蔵をモデルとした映画「地平線」(大都映画株式会社)が存在することが紹介された。8月12日～14日、西口泰助(映画史研究者)、梅津龍太郎(アナウンサー)、杉田卓次(徳島ホール・マネージャー)さんらの尽力によって、徳島ホールでその上映が実現した。その35ミリフィルムは東京国立近代美術館フィルムセンターで唯一巻のみ保管されている。

大宅壮一脚本で、脚色村山知義、監督吉村操・白井戦太郎。あらすじは田所慎一(鳥居龍蔵)、娘の陽子(鳥居幸子、甥の弘一と現地人親子が駱駝でモンゴル平原・砂漠地帯をハラホト城(黒城)を探して旅する。田所夫婦は蒙古人のための学校を開き、日本語を教えた。その妻はその地で亡くなったという設定である。日本語を学んだモンゴルの「ハルマ王」の王子に遭遇する。王子はソ連軍を行動をとともにしていた。「内蒙軍」の進撃、弘一の救出作戦もくみこまれる。「外蒙古」と「内蒙古」軍との国境戦争が勃発し、勝利する。田所慎一家は「日の丸の旗を打ち振る博士一行」(「シナリオ地平線」『日本映画』1939年8月)。映画は「内蒙古軍の凱旋で終わる。